

# 奥村明 著「セレベス戦争」(第5部)

## 敗戦

### 逃亡兵

標高三千メートル級の山を三つこえた。あとは下山となり、マサンバへ到着。昭和二十年八月二十二日のことである。

ここは、ボネ湾にむかう最後の拠点ともいえる村で、民家は数百軒あった。土民はブギス族である。久しぶりに民家に分宿して手足をのばした。あと数日あるけば、ボネ湾岸のパロポに着く。パロポまで来ると、付近の地理は明らかであった。山の背かあら登れば、私たちが構築したランテパオ山嶽陣地におのずから行き着くであろう。

私たちは飢えていた果実にありついた。椰子酒を飲み、お互いの労苦をねぎらった。病人は、三十余名。その他、捻挫、骨折、外傷、悪性の湿疹患者など多種多様あったが、一人の死者もださなかった。奇跡というよりほかはない。ただ、村民の態度に、異質なものが現れていた。

「この村に司政官が滞在しているという。村長が教えてくれたんだが、ぜひ、司政官にお会いになったほうがよいと勧める。これから挨拶に行ってくるからな」

阿部中尉は私たちに言い残して、一人で出向いて行った。私以下、三人の小隊長は三十分ほど待った。中隊長は戻ってきた。真っ白な顔をして、どっしり腰を下ろしたまま無言である。やがて、沈痛な顔を上げた。

「日本は降伏したよ」

私たちは愕然とした。気が狂ったのではないかと思った。中隊長は組んだ腕の中へ顎をうずめ、身をふるわせた。

「司政官がおしえてくれたんだ。われわれが山越え中に、終戦の詔勅が渙発されていた。八月十五日……」

「そんなバカな」

私たちには、寝耳に水であった。三人は半信半疑で顔を見合わせ、また、問い詰めるように中隊長の様子を見た。気が狂ったのもからかっているのでもない。阿部中隊長は横を向き、歯をくいしばっていた。泣くまいとして、大きく目をみひらいていた。

「中隊長殿、自分たちがたしかめてきます。司政官の宿舎はどこですか」

私たちは軍刀をつかみ、殺気だって将校室を飛び出して行った。

通信班は、マサンバ到着と同時に、山中では役にたたなかった幼稚な無線機を奮い立たせて、現、在位置を司令部へ打電した。急遽ランテパオへ還れ、という命令だけで、終戦の報せはなかった。私は、敗戦論は腰抜け司政官のデマではないか、と思ったのだ。もしそうだったら許しておけぬ。

司政官は年配の紳士で、おだやかな態度のなかに威厳があった。私と谷口、福竹准尉の三人は、司政官の部屋へ躍り込むように入って、軍刀の柄をにぎりしめたまま真相を糺した。答えによっては、一刀両断にしてもよいという意気込みであった。

「まあ、おかけなさい」重要なことですから」。血気にはやる若造をたしなめるふうに、司政官は言った。しかし私たちは、突っ立ったまま司政官をにらみつけていた。

「八月十五日、かしこくも天皇陛下におかせられては……」

私たちは思わず不動の姿勢をとった。

「玉音放送により、終戦を宣せられました。阿部中尉殿よりみなさんのご苦勞を承りましたが、戦いは、この十五日で終わったのです。

「終わった？ すると講和が成立したというのですか」五分五分の引き分けですか。だから終戦というのですね」

私は悲しみを抑えて、追及した。

「いや、ポツダム宣言を受諾したのです。残念ですが、無条件降伏です」

「なんだって！ そんなべらぼうなことがあるか。ポツダムかヘッチョコ宣言か知らぬが、我々セレス軍は無キズなんですよ。日本軍が太平洋で米軍に押しまわられていることぐらい知っています。大本営は、負けてはおらんと言ってるじゃないですか。我々はこれから戦うつもりだ。だかあらかこそ、苦しい山嶽行進に耐えてきたんじゃないか。無条件降伏？ とんでもない。それは内地族の腰抜け野郎が作った謀略にちがいない」

「待ってください。いいですか。天皇陛下のご命令により、すべての戦線の日本軍が降伏したんです。私から申すに及びません。大元帥陛下のご命令ですぞ」

私たちは、また、不動の姿勢をとらざるを得なかった。司政官は声をはげました。

「内地は、..東京も空襲で灰燼に帰したということです。これ以上戦えば、皆殺しになったでしょう。広島や長崎にも新型爆弾がおとされて、一瞬に壊滅したということです。陛下は...民族の絶滅を防ぐために...堪え難きを耐え、忍びがたきを忍んで..」

司政官の声は涙で途切れた。

「うそじゃなさそうだ。ほんとうに負けたらしいな。それが真実だとしたら...」

一時に体中の関節がはずれ、骨がばらばらになったような気がした。

「若いあなたたちの気持ちはわかります。どうか冷静に考えてください。おたがいに日本人です」

司政官の言葉をしまいまで聞く必要はなかった。ナマコのような体をやっと支えて、一応、拳手の礼をすると、私たちはもつれた足を引きずって戸外へ出た。それでも心の中で叫んでいた。

「断じて、まけてはおらん。おれたちは負けていない！」

中隊長は、正座して私たちを待っていた。

「ご苦労であった。直接聞いて、納得したろう」阿部中尉は悄然としている私たちをみまわして言った

「無電で、司令部へ確かめてみた。帰任早々、詔勅の写しを伝達するつもりであったらしい。下士官兵には明朝、私から伝える。司令部の返事はこれだけだ。(阿部中隊は軽拳妄動をつつしみ、すみやかに帰任せよ)」

私たちは、黙然と首をたれていた。それから司令官の使いがきた。

「今夜は村の祭りなので、将校以上は参加していただきたい」という招待状であった。

「考えていても仕方がないじゃないか。気をまぎらわせるのも一策だ。どうせ、ねむれやせん。言ってみようじゃないか」

中隊長に誘われると、それもそうだと思う。まず、若い谷口が勢いよく立った。私はしびしび三人のうしろについてでた。

村人は、私たちを歓待した。司政官は、なけなしの葡萄酒一本を私たちの前に出した。私は、酔おうと努め、葡萄酒と椰子酒をちゃんぽんにあおった。ブギス族の男女は、椰子の葉かげで腰振りダンスを踊り、太鼓、バイオリン、ギターなどの伴奏でインドネシアの民謡をうたった。それは、日本の敗戦を同情し、あるいは平和の到来を祝うがごとく、あるいはすすりなくようなメロディーで民族の哀愁を表現しているかのように聞こえた。

私の感応は複雑であった。無念であった。まだ、降伏の実感がなかった。内地は廃墟になったという。信じられなかった。米軍に武装解除され、裸になり、数珠繋ぎに俘虜収容所へたたきこまれる情景が、ちらりと頭をかすめる。私は渡り鳥になっていて、全速力で飛んでいる。いきなり厚い鉄壁がそそりでて、あっという間に碎け散った。私は、亡霊のように山獄地帯をうろついている。そのような幻想や終末の感覚は、土民たちの楽器のメロディーや踊りのさざめきに触発されて、一つの映像を結んだり消したりした。

酔ってきたのに違いないが、心はつめたく冴えている。私は小隊の宿舎に戻りたくなった。同僚や中隊長に声もかけず、よろめく格好で席をはずした。宿舎では、敗戦を知らぬ兵士たちがぐっ

すり眠っていた。私は一人離れて蚊張りに潜り込んで泣いた。眠れるはずがない。敷布も毛布も、涙でくしゃくしゃになるほど泣いた。

この時、終戦すなわち平和、軍隊から開放—内地帰還、という考えがまあたかく浮かばなかったのは不思議である。むしろ、俘虜、恥じらい、不安の塊りが、しこりのように胸を押しつけていた。負けたことが悔しくてたまらなかった。

翌日、日朝点呼の際、中隊全員を広場へ集めて、中隊長は終戦を告げた。小隊の宿舎へ戻った兵士たちは、ほとんど泣いていた。阿部中尉は、この村は縁起が悪いから、朝食後すぐ出発する、と告げた。二、三日は休養できると思っていた病人たちは、うんざりしたに違いない。

敗戦によって、ロダも苦力も徴発できぬことが申し合わされた。労苦を共にしてきたロダと苦力にも別れた。病人は戦友が背負って行かねばならない。重火器も携行しなければならない。そのうえ敗戦の衝撃で、健康者の士気も阻喪していた。

整列がかかっても、兵士たちはいつものように敏捷には動かなかった。泣き面で、のろのろとあつまってくる。

「出発」の号令で歩き出したが、昨日までとは違っていた。どこから見ても矢折れ弾尽きた敗残兵の行進であった。前進に希望が失われたのだ。みんな、骨抜きになっているのだ。私は、そのような部下の姿がなさけなかった。居丈高になって、

「シャンとしろ。なんだ、そのざまは！そんな精神だから戦争に負けるのだ。いや、まだ正式な伝達はうけておらん。俺たちだけは負けておらん。まだ、日本の軍隊だ！」

叱咤し、口では強がりを言った。しかし夜に入り、椰子林の草地で露営の天幕を張って、無情のスコールにおそわれたとき、私は声をあげて泣きたかった。露営の豪雨など何度も経験済みで、苦労などとは思わなくなっていたはずだ。それが、身に応えた。ずぶぬれになって、冷たい雨ははらわたにしみ込んだ。私は女のくさったように「なぜ、負けたんだ、バカ、バカ」と思い続けながら、ひしと自分の体を抱きしめた」

赤道直下数千キロを歩き続けただけの戦争参加とは、空しすぎた。一人の敵兵とも撃ち合ったことがない。台湾、フィリピン、ハルマヘラ、——そして、セレベス島北東部先端から中部セレベ

スを縦断、南部セレベスへ南下しながら山嶽地帯を横切った。地獄の亡者みたいに歩きにあるいた。九死に一生を得て頑張り続けた精神の迫力も、戦争に勝とうと思ひ、勝っていると信じていればこそだ。そんな将兵の苦労も知らず、かんじんの天皇陛下が手を挙げてしまったとは！

私は何かの道化芝居を、「死」を賭してやっていたのか。しかも、三千メートルの山嶺に挑みつたつたその時点で、すでに戦争は終わっていたとは。滑稽とも悔しいとも言いようがない。

あやつり人形は、実は人形遣いの紐を離され、勝手に地獄の苦役を演じていた。もしあのとき遭難して中隊全員が死んでいたとしたら、永遠に終戦を知らなかったことになる。それは、どういうことなんだ？

だが、終戦を知らずに死んだ護国の鬼は、私の僚友の中に何人もいた。無条件降伏——すると、戦死者の魂は何をもって償われるのか。

いつの間にかスコールは去ったようであった。終末のしずくが、椰子の葉末を伝わって、頭上の破れテントへ、ポットン、ポットンと落ちかかっている。太平洋戦争は豪雨の勢いで開始され、地球をゆるがすように吹きすさんだが、いつの間にかはかなく終わっていて、将兵の涙のように、ポットン、ポットンと余滴の音をひびかせている。いったい、日本は何のためにあの大戦争を始めたのだ。負けるためにこんな犠牲をはらったのか。「民族の絶滅を救うため・・・」やめろ、やめろ。急にそんなこと言われたって、納得できるものではない。私は、明け方までまんじりとしなかった。

ボネ湾北西部の町パロポの大休止を経て、山嶽地帯を西に横断、九十九折の急峻をぐるぐる回り、やっと、なつかしい山の陣地に到着した。ちょっと好奇心をおこしたが、トラジャ族の女で作った慰安所は、もちろん取り壊されて影も形もなかった。

立派な洞窟要塞は残っていたが、いまは使い物にならない。兵士、労務者の姿はなかった。

大隊本部は、ランテパオ高地へ移駐していた。私たちは、ニツパ葺きの屋根も壁も濡れ腐った、元の中隊宿舎で一泊した。陣地を築くためのエネルギーが爆発していたトンネル要塞といい、やっと形をとどめているに等しい宿舎といい、人影のない残骸めいた荒涼たるながめは、敗戦をはっきりわたしたちに突き付けてた。私たちは暗澹として、宿舎を補修したあと、元の場所へ毛布を敷いたが、気が滅入ってならなかった。「おかえりなさい」と、まめまめしく迎えてくれたのは、多数の山ビルだけであった、泣くにも泣けない気持ちであった。

下士官兵は、やけになって大声でわめいたり、ぼそぼそと愚痴っぽく語り合ったりしていた。今後、私たちはどうなるのか。進駐してくる敵占領軍と一戦を交えて、いさぎよく果てるのか。服従すれば、いつかは母国へ帰してくれるのか。武装解除されて俘虜の奴隷生活に甘んじるのか、諸説ぶんぶん入り乱れて、帰するところはない。

「還すものか。帰還とみせかけ、全員太平洋へ棄てられるのが関の山さ。鬼畜米英のすることだ。甘く考えちゃいかん」

「もしもだよ。帰還したって日本帝国はほろびてらあ。男はキン抜き、女は鬼畜の餌食になってるよ。わが家？ 残っちゃおらん。なーんにも、ありやしない」

「アメちゃんの奴隷はいやだぜ。ああ、えらいことになりやがったなあ。アイ・アム・ソーリー」

笑い声は絶望的な自嘲であった。不安、疑惑、動揺を言葉にして、叩きつけているだけの果てしない議論が空転しているだけのことであった。これに明確な回答を与えよう者は、中隊中ただひとりもいるはずがなかった。盲人が盲人に手を差し伸べているようないら立ちが、やけくその大気になって爆発していた。

「小隊長殿、どう思いますか」と、問われても、私は黙するよりほかなかった。

この際、烏合の衆の混乱が何よりも危険であった。内部崩壊と退廃を避けるために、軍隊生活の規律は維持しておかねばならない。また、私たちの場合、日本軍隊が存続している。指揮者として、小隊を掌握する必要上、私は個人的には膝をまじえて雑談もするが、自らの態度で軍規の厳正を示さねばならなかった。いままでどおり公私の線をハッキリして、日夕点呼、日朝点呼は厳格に行使した。

破れたりとはいえ、目的地のランテパオに到着して元の中隊宿舎で内務生活に入る以上、露営中の放縦はゆるされなかった。私は兵士たちの気持ちを引き締めるために日直士官を買って出て、日朝点呼は中隊全員を宿舎前に整列させた。しかし、松本軍曹以下六名の指揮班が点呼に出てこなかった。点呼なんてでられるか、と宿舎でふて寝を続けているにちがいない。怒った私は、週番下士官にたたき起こしてくるよう命じた。

戻ってきた下士官は、わたしに告げた。

「松本軍曹以下六名は、宿舎におりません。念のため岡本曹長の居室に参りましたら、曹長殿も不在で、こんな書置きがありました。

「何、書置き？」

岡本曹長は営外居住待遇の指揮班長で、点呼には出ないことになっている。私は、しまったと思った。陸軍通信用紙を一枚ひきやぶった紙片に、曹長の筆跡で次のような文章がしたためてあった。

「戦いに敗れたのは日本内地だ。われわれは断じて敗北などしていない。断断乎として、最後までたたかうものである。われらは、ふたたび祖国へ還らず、永遠にこの地にとどまり、帝国軍人として所期の目的を達成する決意である。ただいまよりその目的に向かい邁進する。戦友よ、我らを追及してはならない。もし、我らを捕らえようとするものあらば、たとえ戦友であれ、敵とみなして射殺する。諸君、長い間お世話になった。ありがとう。よろしく」

連名は岡本曹長のほか松本軍曹、兵士五名であった。私は一同に解散を命じ、紙片をつかんだまま中隊長宿舎へ走って行った。

わたしは中隊長の命をうけ、ただちに搜索隊を四散させ、分裂した気持ちで搜索の結果をまつた。「勝手に隊をはなれえるとは何事だ」という怒りと、「なかなかやるじゃないか」という気持ちが錯綜していた。

「絶対に捕らえてやる」

「逃げきれ。愉快的やつらだ」

わたしの内部で二つの声が争っていた。場合によっては小隊を引き連れ、あくまで降伏を肯んぜず、山中にゲリラとなって、永久抗戦を続けるのもわるくない。俘虜になって殺されるくらいなら一世一代のバクチをしてもいいのではないか。私の気持ちは、しだいに、逃げた岡本曹長一行へかたむいていくようであった。搜索隊から、伝令が駆け戻ってきた。

「ここより三百メートルの地点に、靴跡のくぼみを発見、ジャングル尾根入り口に白米が落ちこぼれていました。

「よし！ まだ遠くはないな。待っておれ」

わたしは、中隊長に伝令の報告を伝えた。(かわいそうに。やつらはつかまえられてしまう)「中隊総出で追跡しましょうか。伝令は待たせてあります」

「おれが行く」と、あべ中尉は厳しい表情で立ち上がった。

「中隊長殿、これはやはり、敵前逃亡と同じになりますか」

「なる」

たしかに、私たちの場合、軍隊は厳然と存在している。解隊の命令はうけていない。それゆえに私も軍紀厳正をみずからに課し、部下を掌握しようとしていたのではないか。軍司令官の意図はわからないが、あるいは無傷のセレベス軍だけで、最後の一戦を交えないともかぎらないのである。そうなれば、一兵の損失もゆるされない。すると、岡本曹長以下七名は、敵前逃亡の罪に問われるかもしれない。(やつら、へまをやりやがったな)

しかし、私に彼らを救い出す手立てはみづかりそうもなかった。

「全員に非常呼集をかけるにもおよぶまい。俺につづけ！」伝令一人だけつれて、安倍中尉は宿舎をとびだした。私はあとに続いた。道々、わたしは願った。

(はやく逃げろ。見つかったら死刑だぞ)

山の陣地から東南へ下降延長している尾根の入り口に、搜索の一個分隊が待機していた。分隊長は、百メートル奥の叢林に逃亡者が潜伏しているらしい、と中隊長に告げた。分隊が近くまで迫りながら、捕らえようとしなかったのは、相手の射撃をおそれたためである。

「分隊長は銃を置いて、俺を案内せよ。あとは、伝令ひとりついてこい。騒ぐな」

阿部中尉は言った。丸腰でかけたのは、とらえようとするためではなく、話し合いで帰順を勧告するつもりらしい。「中隊長を撃つはずがない」と阿部中尉はわらった。私たちは固唾をのんで待っていた。

やがて藪の小径がざわざわと鳴り、靴音がして、中隊長の姿があらわれた。つづいて、悄然とうなだれた曹長以下七名の逃亡者が、後尾の分隊長に護られ、ぞろぞろと姿をあらわした。

「涼しくて、山ビルもない、昼寝にはもってこいの場所なんだ。終戦になったんで、のんびり昼寝に登ってきたらしい。のんきなものだ。こっちは逃亡したと思うじゃないか」阿部中尉は、彼らを弁護するように言った。岡本曹長は、はじめて照れくさそうな笑いをうかべた。

「いいか。今回の昼寝事件は誰にも言うな。中隊限りにしておこう。まあ、無事でよかった。兵隊を責めてはならんぞ」

中隊長は快淡とした表情で言い、何事もなかったように煙草に火をつけた。私は感動していた。(おとなだ。三十二歳、名実歴戦の中隊長にはとてもかなわない)

## トラジャ高原の娘たち

その後、中隊から逃亡者が出たのは、ランテパオの軍司令部に復帰した翌日であった。河野という一等兵である。私は河野のために祈った「単身ゲリラとなって山中の洞穴で朽ち果てるか。トラジャ族の女と家庭をもってセレベスでいきながらえるか。どうか無事であれ」

私たちはマサンバから二百キロ歩いて、軍司令部の位置にたどりついた。大隊本部と合流。大隊長大竹少佐から終戦の詔勅を正式に受けた。

大竹少佐は、私たちの労をねぎらい、谷口少尉(任官したが発病)以下三十名をランテパオ野戦病院に入院させると、近くのサダン河へ帰還中隊を引率して行った。

手持ちの手榴弾を川底へ投擲爆発させ、黒コイを生け捕りにしたのである。たべきれぬほどの漁があった。鯉のあらい、鯉こくなど、好き勝手の料理をして酒を飲み、私たちは大いに満足した。大隊長は何も言わなかったが、私たちにこれから飢えの生活が待ち構えていることを知っていたからであろう。手榴弾もいずれ、敵軍に引き揚げられる。私たちに対する大隊長のせめてもの温情であったにちがいない。その夜は、泣き笑いの大饗宴であった。

連合軍が進駐してきて、武装解除がはじまった。進駐兵が直接監視しない、大隊単位の自主解除は、私たちにいくぶんの安らぎをあたえた。私たちは一応武装し、最後の皇軍としての身だし

なみを整えてから、宮城の方向に面して捧げ筒をした。大竹少佐の号令であった。それは、兵器に対する決別でもあり、天皇陛下にお返しする報告でもあった。敵の手に渡すと思えば、くやし涙があふれた。

広場に重火器をならべた。帯剣、弾薬の山ができた。三八式歩兵銃は菊の紋章をヤスリでけずりとった。歩兵の魂として大事に手入れをしてきた小銃は、夏の大掃除にがらくたを放り投げるように積み上げられた。私は、家伝の銘刀を惜しげもなく投げ捨てた。軍刀に未練はなかったが、言われるままに意気地なく武装解除しているぶざまな部隊が、自分をふくめて我慢ならなかった。

この情けない結末はどうだ？ 皇軍不敗を絶叫し、最後の兵まで戦えと私たちを督戦し、あくまで勝利を信じさせ、悲観的言辞を弄する者は非国民と弾劾し、いつわりの大本営発表で敗戦を糊塗しつつけていた軍政界首脳部の正体は、いったい何だ。それをまた狂信的に憑かれた上級軍人が居丈高に命令を発し、勝ち目のない戦闘を強要し、いくたの部隊は滅び去ったのだ。わけもわからず帝国軍人というサムライの仮面をかぶり、ジャレ言をいっていただけなのか。

わたしは怒っていた。しかし皇国の必勝を信じて、「死は鴻毛より軽し」と、欣然護国の鬼となった将兵は、いまごろ灼熱地獄のるつぼの中で地団駄ふみ、怒り狂って、成仏できないだろう。そう思うと、ますます怒りがこみあげた。

気がつくとなわたしは、薄汚れた少尉の襟章だけは剥奪されないでいたが、毛をむしり取られた日本軍人の残骸となっていた。丸腰の、あわれな若造でしかなかった。あとは敵さんのお気にめすまま、煮ても焼いても文句は言えない。

日本軍に所属していたジャワ兵補は解除となった。現地人の使用・徴発は禁じられた。軍票は流通しなくなり、紙切れ同然となった。酒もタバコも飲まずに節約して軍票を貯蓄し、凱旋時の土産にしようと楽しんでいた兵士がかなりあった。戦争がどんなに冷酷無残で、一望の夢にもにてはかないものであるかということ、羽が生えて突然飛び去った軍票によっても思い知された。全員が無一文になってしまった。

しゃくにさわって持ち金の軍票を焼き、灰になるのを茫然とみつめ、あるいは呵々大笑している兵士の姿があった。百円札を便所の落とし紙に使って、せめてもの腹いせにした者もいた。

しかし、何よりも私たちが不安に思っているのは、今後の身の振り方であり、占領軍がわたしたちをどのように料理するかということであった。

九月下旬、身も心も敗残兵の姿で、私たちはマカレ西方四キロ、リンブン高原へ移動した。移動というより、追われたと言った方が正しい。リンブンは眺望絶佳の高原地帯で涼しく、眼下のサダン河を挟んでトラジャ族の村落がみえた。まず、天幕の仮小屋からはじめて、大隊の駐留するニツパ葺きの宿舎の建築にかかった。

戦争のない事実で、ようやく私たちの肩から余分な力が抜け始めた。部隊の階級と組織は元どおりであり、直接には進駐軍の監視も受けることはなかったために心の落ち着きを取り戻した。俘虜収容所にいれられて重労働に服するとか、処刑されるという憶測は単なる杞憂にすぎなかった。

鬼畜米英の処置が案外手ぬるいのに驚き、また、ほっとしてもいたが、考えてみると戦争継続中の俘虜ではなく、降伏武装解除後の抑留者なのである。

戦犯として取り調べられることもなく、強制奴隷労働もなかったが、そのかわり食料はあたえられない。軍の糧秣庫から、米、缶詰類の支給は当分あるが、一年とは持つまいといわれていた。すなわち、自分でたがやし自分で収穫し、自分で生きていけ、という進駐軍の方針である。野菜やいも類の種が支給された。敗戦の私たちにとって、自給自足の要請は当然のことと思われた。囚人扱いされない「自由」はありがたく、なにごとにも代えがたい。

私たちは欣然として農地の開墾にとりかかった。しかし、いざ取り掛かってみると、自給自足も口で言うほど簡単なものではなかった。運わるく乾期にはいったばかりであった。農耕に適する雨

期まで、あと半年は待たねばならない。竹林の葉もおちて大地がからからになってしまうという乾期にさしかかって、現地土民は農耕を放棄したばかりである。だからと言って、私たちまでのんびり雨季を待っているわけにはいかない。

とりあえず、サダン河の河原とその流域に農耕地を選定して開墾をはじめた。半分に切ったドラム缶を水桶代用にしてロープをひっかけ、川の水をくみ上げた。くみ上げた水を一段高い河原に担ぎ上げ、たがやした畑地へ撒水した。灌漑の労働もきつかったが、せっかくの撒水も二、三

時間すると元通りに干上がった。干天に慈雨、という程度にもいかない。賽の河原の砂運びに似た徒労の苦役であった。

私たちは、灌木の枝や葉を、遠くから刈り集めてきた。農耕地の上に広大な日覆いのハウスを作り、蔭になった土壤に水をやる工夫をした。それでも、じゅうぶん水を吸い込ませるためには、おなじ場所へ日中に三回も撒水しなければならない。農機具は支給されなかった。岩窟トンネル掘りに使った器材で利用できそうなものを持ち出したが、耕作に適したものは円匙(エンピ。小型の組み立て式スコップ)くらいのものであった。

支給された日本産野菜種子は土地に合わず、ほとんど発芽しなかった。やっと発芽した少量のか弱い双葉は熱気にむされて、数日にして立ち枯れた。野菜の収穫は雨季まで絶望とみなされた。炎熱に強いサツマイモとタピオカが最も適しているという結論に達し、耕地の大部分を芋畑にして作付けを終わったが、これが口に入るのはいつのことかわからない。それまで野菜をどのようにして補給するかというのが当面の課題となった。

雑嚢を肩にかけ、ドンゴロス袋を担いで、野菜採取の一隊が、毎日のように宿舎をでていった。高原を遠くはなれ、ジャングル地帯にまで分け入って野草をさがした。シダのわらびのゼンマイ、噛んで辛くない草のやわらかい新芽、野生の花の花卉など、食べられそうなものはことごとく採集してきた。持ち主のある農園の野菜畑に、足を踏み入れてはならなかった。バナナ一本ちぎって歩くこともできなかった。

まだ、配給の米と缶詰類、たまには乾燥野菜が配給された。だがあと半年、一年のちには、どうなっているだろうか。飢えの不安が私たちを脅かしはじめた。軍票は使えない。負けたとはいえ、現地住民のところへ物乞いにいくほど落ちぶれたくはなかった。しかも、軍のパンフレットが回覧できるようになってから、内地の被害状況がわかるようになり、占領下の日本の廃墟から立ち上がろうとする息吹きも伝わってきた。ただ、私たちの未来があいまいな靄につつまれていることにいら立ちを覚えた。

連合軍は、外地の日本軍将兵を全部帰還させることを確約したという。私たちは、そのパンフレット会報に接したとき、はじめて胸をなでおろし、創刊の時機は不明であるとしても、食料が切れるまでにはあるいは還れるかもしれぬ、という期待をもった。タピオカ芋を口にするまでに還れた

らしめたものだ、と心ひそかに思った。ところが次の会報で、軍の某参謀談として絶望的な記事が私たちを打ちのめした。

「祖国への帰還復帰については、輸送船舶数が限られているため、セレベス抑留者の見通しはつかない。たとえば、終戦時に最も苦難をうけた各戦線、南方ではニューギニアの将兵および負傷者、病人などが優先するであろう。おそらく全部の送還が終わるのは、昭和三十年ころと想像される。最終引き揚げ組は、場所によって、もっと遅れるかもしれない。わが軍は、少なくともあと十年はここにとどまり、自給自足の体制を確立しなかならならぬであろう」—— と。

「冗談じゃねえ。白髪になってしまう」と、ロートル兵士たちは頭をかかえた。

私は、戦争中豪放で鼻っ柱の強かったカミナリ大隊長、大竹少佐に激励の鞭をうけたくなった。最悪の場合、十年後としても私は三十代の働き盛りで祖国の土をふむことになる。だがそれまで、熱帯の飢餓生活に耐え、病気もせず、いのちを全うできるかどうか、不安になっていた。私は、大隊長からの「大丈夫だ」という力強い言葉と、本当の見通しを期待した。

しかし、大竹少佐は心痛の面持ちで言った。

「われわれが、あと五年、昭和二十五、六年ごろまで帰還できないとすると、まず、部隊の半数は死亡する。三十年ともなれば生き抜くのは奇跡であろう。帰還のことは考えるな」

強いて、私が大隊長の悲観的なことばから得た教訓は、永久にセレベスの土地に同化して生き抜く、という粘りと、明日のことを思い煩わない強靱な現実主義者であれ、ということであろう。私は、今日一日、たくましく生きようと自分に誓った。

ある日、洗濯したてのさっぱりした衣服で、俘虜らしからぬ端正な身だしなみをして野草採集に出かけて行った小隊の兵士たちが、野菜と果実を仕入れてかえてきた。現地人の村に入って掠奪することは、厳しく禁じてあった。私が詰問する前に、兵士たちは答えた。「物々交換という手がありました。背に腹はかえられません」

かれらの語るところによると、村人たちは日本の木綿類の布切れ、シャツやズボン下などは洗いざらしでもよいから欲しがっている、というのであった。兵士たちは、なけなしの下着類を持ち出して、小隊をうるおすほどの野菜、果実を、合法的に手に入れてきたのであった。兵士の衣服は

軍の官給品であるが、今は各人の私物になっている。窮すれば通ずで、兵士の知恵にはかなわない。

「うまいこと考えついたな。だが、裸にされんよう気を付けろ。禪一本では母国に還れんぞ」

私は一応注意をあたえておいて「おれもやってやろう」と思っていた。生き抜くためのたくましさは、咎めるにあたらぬ。私たちは次第に帝国軍人でなくなり、郷に入れば郷に従う式の、むき出しの地方人になり、道徳的価値観が変容しつつあることを覚った。

物々交換に次いで、奇妙な状況があらわれた。

村の青年と娘たちが、私たちの宿舎へ遊びにくるようになったのである。物々交換で顔見知りになった兵士をたずね、はじめ、青年たちは野菜や果実を持ってきて、衣服と交換して帰った。そのうちに、親しくなった兵士のもとへは、贈物として野菜、果実、花などを捧げ、愉快そうに雑談して帰った。日本軍占領中に日本語学校に通ったという青年もまじっていて、片言の日本語とマレー語でしゃべり、手まねや表情で話が通じた。兵士たちにとっては思わぬ賓客である。

旧軍隊の内務では、面会日以外の兵舎出入りは親族といえどもゆるされない。その点、今は自由な抑留の集団生活である。上司からの注意がなければ、村人の面会を禁ずる必要もない。兵士たちは、さっぱりした服装の青年や娘たちの面会を歓迎した。それは略奪でも恐喝でもなく、青年たちの善意と友情によって、のどから手が出るほどの野菜がタダで得られたからであった。

訪ねてくる青年男女は、トラジャ族のなかでも新しい時代を背負ってたつ文明人の感触があった。もともと、トラジャ族の発生をたどれば、台湾の高砂族同様、蒙古系のマレー人に属し、肌色、風貌ともに日本人と似ている。一緒に来る娘たちは、簡潔な布一枚でからだをつつみ、あるいは短い上衣とサロン姿の貧しい服装ながら、山嶽土民のように乳房を丸出しにしている者は一人もいなかった。乳房のふくらみの下部はひっそりと隠しており、両の耳たぶに子供の時開けた穴から愛くるしい飾り輪をとおして、純朴可憐な印象を醸し出していた。

訪ねてくる娘たちの数が徐々に増えてきた。酋長の息子と近いうちに結婚するという娘までやってきた。どんな魂胆があるのか。私たちは不思議でならなかった。武器をもたぬ日本人に親しみをおぼえ、ただ気楽に遊びに来ているだけなのか。野菜と果実を餌にして、日本人を身ぐるみはぎとる気なのか。娘の色香で誘惑をたのしんでいるだけなのか。ただ単に、無邪気で純朴な現

地人氣質なのか。私たちはいろいろ憶測し警戒しながらも、決して悪い気持ちではなかったのだ。

土地柄や人種によって、日本人の私には想像もできない風習というのがあるものだ。かなり親しくなってから。一人の青年が私たちに奇怪なトラジャ族の風習をおしえてくれた。

トラジャ族も、他のインドネシアの結婚風習とおなじく一夫多妻であるが、結婚後の性道德の厳しさは言語に絶する。隣のブギス族と同じように、浮気した妻は血の制裁をうける。ところが、結婚前の独身時代は自由奔放のフリーセックスといってもよい。娘の浮気は公認されていた。何人の男と恋を語り、たとえ異民族の男と浮気しても、咎められることはない。独身時代の浮気と享樂は。結婚後の戒律を守るためにも必要で、経験が多く、深ければ深いほど、祝福されるというのである。これは先祖代々受け継がれてきた教訓で、宗教的な意味もあるのだという。

私たちは愕然とした。独身時代と結婚後の両極端がどう考えてもむすびつかない。しかし聞いた限りにおいては、奇想天外なおとぎ話の世界へ足を踏み入れたような感覚にひたった。

侵略的な武装を解いて、南国の原住民の世界に人間として触れあったために、彼らの正体を発見できたのであろうか。

「だから、日本の皆さんもはやく恋人をさがしなさい、しっかり、しっかり」と青年は笑いながら私たちを扇動した。現実として、トラジャ族の性別分布は、男より女の方がはるかに多いらしい。女が余り過ぎて、アンバランスに困りぬいているのだという。剽軽な兵士たちは青年をからかった。

「まことに結構な話なれど、われらのチンタ(恋人)にサキ(病氣・性病)ティダか(ないか)」

「心配ない」と、青年はむきになって論じた。ここに連れてくる娘たちは、清純無垢の生娘である、と断言した。

「それで、木綿のシャツ一枚で一回の浮気ができるであろうか」

「金や品物では浮気をしない。一对一の恋愛でなければならない」

そうでなければ、清純な独身娘が浮気をするはずがないであろう。いずれにせよ、この地球上には、かわった人種もあるものだ。恋愛なら各人の腕に待つよりないが、私は一応、「裸にならぬように」という含蓄のある注意を兵士たちに与えた。

村人とのコミュニケーションは、私たちの抑留生活に潤いをもたらした。乾期の農耕は困難をきわめたが、たまに降るスコールのあとの、雄大華麗な虹の色彩を浴び、八時間の労働を終えて帰るときの気持ちは別格であった。

夜は、青年たちが遊びに来た。娘たちは、トラジャ高原に咲く花であった。夜露に濡れた草原のあちこちから、哀愁にみちたトラジャ人たちの歌声がわきおこる。娘たちの声にあわせて、兵士たちも合唱した。恋を射止めた兵士もあった。

絶望的な抑留生活の砂漠へ放りだされながら、兵士たちはオアシスを発見し、失ったはずの青春を再びよみがえらせていた。たとえ、原始の土人であろうと、人間にめぐり合えなければ生きていけない。耐えがたい郷愁を内に包んでいるがゆえに、砂漠に見つけた花の香りは刺激に満ちて、一瞬の情熱に身を滅ぼしたくなるような、虚無的な快樂をもとめた。ときには感傷的でさえあり、やるせなくもあったが、私たちは南国のロマンチズムに陶醉した。

しかしこれらが、自由な海外旅行者の猟奇的なロマンスと違うのは言うまでもない。私たちの願いはあくまで祖国に帰還して、完全に開放され、家族との真の愛の巣をいとなむことにかかっていた。

とはいえ、五年も十年も気の遠くなるような抑留生活が続いたとしても、あながち絶望するにはおよばない。どこに泉が湧き花が咲くかわからないという運命の不可知性を、心のともしびとしたことは事実である。

## 原始のオアシス

このように安穏な暮らしのなかにも、俘虜であることを強烈に思い知らされる事件が生起した。

戦争中、私たちが山嶽踏査に苦闘していたころ、第二中隊の浜野少尉は、兵二十名を率いてマジェネの憲兵分隊に救援隊として赴いた。マジェネはリンポン村西方百キロの地点で、抗日ゲリラが蠢動して、軍曹を長とする憲兵分隊が危険にさらされていた。浜野少尉たちが到着してゲリラの鎮圧にあたっている最中に終戦となって、浜野隊に原隊(大隊)復帰の命令がでた。

浜野少尉はなかなか帰ってこなかった。やっと大隊に復帰したのは九月の中旬であったが、四名の兵士が欠落していた。その四名は、憲兵軍曹以下とマジエネにとどまり、終戦を認めず、あくまでも抗戦すると言ってきかない。説得のために時日を要して帰隊がおくれたのだ、と浜野は釈明した。

第二中隊長(川辺中尉)も、大隊長も、浜野を叱責した。そのまま握りつぶすわけにもいかないのだ。浜野は謹慎、川辺中隊長は武装の二個分隊を率いて、マジエネへ説得におもむくことになった。。

川辺隊は特別に各人の小銃携行をゆるされたほか、重機一丁を支給された。軍曹以下の帰順説得が不可能な場合は射殺せよ、との命令をうけたのである。

マジエネの憲兵分隊跡に抗戦組の姿は見えなかったが、ついに山中の拠点をさぐりあてた。中隊長は説得にかかったが、軍曹は頑として応じなかつた。

「そんな懐柔には乗らんぞ」と軍曹は言った。「占領軍の命令で俺たちを捕らえにやってきたんだらう。それでも帝国軍人か。おれたち憲兵は、第一番に戦犯の処刑台にひっぱりだされるんだ。敵の手にかかるくらいなら自決する。おれたちは、あくまで逃げ切るつもりだ。そして、抗戦をつづける。中尉殿が軍人なら、見逃してくれ。行方不明ということにしてもらいたい」

「私の中隊の四名は憲兵ではない。四名だけでも帰してくれ」

中隊長は説得に努めた。だが、軍曹と問答をしているうちに兵士たちは逃げた。「逃がしてくれ！」と突然絶叫して、軍曹も身をひるがえした。射殺するのが目的ではなかった。

「追え！射つな。捕まえろ」中隊長は部下に号令をかけると、威嚇の拳銃をにぎりしめて真っ先に走り出した。兵士たちは追い、機関銃があとに続いた。中隊長と戦友が連れ戻しに来たと知りながら、ひげ出すとはよほどのことであろう。っそこまで思い詰める理由はわからないが、これはとても無理だろう、と兵士たちは思った。しかし、四名の名を連呼しながら、追って行った。

逃げるだけで反撃しないのが、せめてものなぐさめであった。同士討ちとなったら目もあてられない。

「話をしよう。引き返せ！」

中隊長は悲痛な声でよばわりながら、逃亡を決意した部下があわれでならなかった。逃亡者の一隊は山を降り、谷川に直面した。銃を背にして泳ぎ始めた。日は暮れかかっている。対岸のジャングルへ入れば、姿を見失ってしまう。

「射て！」川辺に立った中隊長は、機関銃隊に命じた。もはやこれまでと思い、目をとじた。射撃せよとの命令を実行しないわけにはいかない。射手は川岸に伏せ、照準をあわせて引き金に指をあてた。宵闇の川面に浮つ沈みつ、後尾の兵がかたまって泳いでいく像がはっきりと捉えられた。バリ、バリ、バリと連続点射。川面に水煙があがった。しかし、射手はわざと照準を狂わせたのである。

「命中しませんでした。逃亡兵は川向こうのジャングルに逃げ込みました。残念です。一人も連れ戻せず、全員取り逃がしたのは私の責任であります」

川辺中尉は悄然として、大竹少佐に報告した。

「いや、責任は私がとる」大隊長は毅然として言い、中隊長をなだめた。

だが、大隊長も兵士を射殺しなかった事態に、ほっと、安堵の吐息をもらした。上官の手で部下を討ち取る意味はほとんどない。占領軍への申し開きだけが難関であった。この事件は、軍司令部かぎり握りつぶそうと図ったが、占領軍の要求はきびしかった。結局、浜野少尉一人が、ランテパオ軍事法廷へよびだされた。逃亡防止のみせしめとして、浜野は七年の禁固刑を言い渡され、この事件の犠牲となった。

私は、機関銃の射手であった兵士が、私の小隊の戦友にそっと耳打ちしたことから、この真相を伺い知った。また、川辺中隊長の心境については、阿部中尉を通して知った。そのような状況では誰でも、そうするより仕方がなかったであろう。気の毒なのは、実刑に服した浜野少尉である。私が浜野と同じ立場であれば、この運命は私の身に落ちてきたにちがいがなかった、これからも似たようなことが起こるかもしれないと思ったとき、安穏な抑留生活の底で、絶えず不気味な監視の目が光っていることをはっきり感じた。私たちはもはや、日本軍隊の中にはいない。巨大な勝者、連合軍の手のひらのなかで、一喜一憂している敗残の小人でしかなかった。

これで、もう逃亡兵は出ないと思われた。ところがある日、福竹准尉の当番兵池内上等兵(大阪出身・元料理人)が、忽然と姿をくらました。池内は剽軽な兵士で、いつも人をげらげらわらわし

ていた。彼が働いていた釜ヶ崎のジャンジャン横町の挿話を、いつも面白おかしく開陳していた。その、愛嬌者で明朗な池内の逃亡の動機は、誰一人憶測できなかった。八方へ搜索隊を派遣したが空しく、三日目になってやっと、死体で発見された。

池内は、高原の土民の掘立小屋で死んでいた。心臓麻痺がとどめをさしたらしいが、本当の死因はわからなかった。

翌日、連鎖反応のように内海上等兵が蒸発した。内海の話は分からずじまいになったが、憲兵とともに逃げた四名といい、池内といい、内海といい、逃げた者の心理はどう考えてもつかめない。しかし、彼らが決意するまでにどのように煩悶したかを思いやると、死を賭けての実行の重みは、煩悶しなかった一般将兵にくらべ、つまらない憶測や憐憫をはねかえすものをもっている。それは彼等自身の問題とすべきものであろう。

だが、逃亡第一号の河野一等兵が、やせさらばえて三カ月ぶりにひょっこり帰って来たことで、逃亡兵はあとを断った。

「とうてい、逃げ切れるもんじゃないってことが、わかりましたよ」と、両手をついてあやまりながら河野は言った。「はじめはトラジャ人の家を逃げ回っていたが、いつまでも厄介になっているわけにはいかない。見つかってしまうからね。山の洞窟にとじこもっていると、食べ物をさがすのも大変だし、山ビルに吸いつかれル、毒蛇には襲われる。ついにマラリアで倒れてしまい、呼べど叫べど助けてくれるものはいない。手持ちのキニーネも少なくなって、野垂れ死にするよりはと、仕方なく戻ってきたんだ。熱帯病蔓延のこの地で逃げ切るなんて絶対不可能です。仲間がいれば別でしょうけどね。軽率でした。ゆるしてください」

河野は、逃亡は墓穴を掘るようなものだと懺悔して歩いた。私たちは彼を罰しなかった。むしろ、逃亡防止の生き証人になってもらいたかった。

兵士の単独逃亡は、河野、池内、内海の三人にすぎなかったから、その都度、「搜索中」ということで大隊長が握りつぶしていたからでもある。

さて、私たちは十月中旬に、丹精したサダン川流域の農耕地をすてて、ランテパオの野戦病院の付属農耕地へ移った。大隊が、野戦病院の専属農耕隊に任じられたためである。おそらく、ここで何年も自給自足して帰国を待つものと思っていた私たちは、乾季のやせた耕地とはいえ、す

くならず落胆した。苦勞した土地に愛着をもつようになっていたし、放擲して去るのも惜しかった。

移動の命令を受けて私たちが思い知らされたことは、「今後も定住などありえない」ということであつた。農地を開墾して、食料が自給できるようになる直前に、移動命令が出ないともかぎらない。いままでは戦闘のための移動命令であつたが、これからは占領軍の糸に操られる労働カジプシーにすぎない。心すべきことでことであつた

案の定、ランテパオ野戦病院に着任して宿舎バラックを建て終わったとき、私の小隊に移動命令が出た。ランテパオ西南方十五キロの軍属管理農耕地へ分駐し、病院補給農作物の生産を実施せよ、という趣旨の命令である。ニツパ小屋の宿舎も指定された。私は早速、小隊を率いて任地へ向け出発した。

あわただしいことにかけては、戦中と変わりがない。私は内心あきれた。陸軍少尉となりながら、戦中、セレベス島までつれてこられ、気がつくと港の揚陸作業で沖仲士や土方をやっていた。それから、歩兵らしく歩きに歩いたとはいえ、終戦となると農作業であつた。万歳で送られた勇敢なる軍人は、沖仲士から百姓へ移っただけのことである。こんな戦争は恥ずかしくて人にもしゃべれない。

しかし、赴任地のトラジャ盆地は、風光絶佳で土地は肥えていた。すでに軍属が管理していた農耕地は灌漑排水も行き届いており、野菜が豊富に生育しえいた。日本種の大根、胡瓜、茄子、葱などである。私たちは目をみはつた。

種子も土地も優秀なうえ、谷川の本流支流の合流点に耕作地が広がっているのであつた。私たちの宿舎も申し分なかつた。ニツパ葺き竹製のバラックであるが、小隊が起居できる広さの一軒建てである。目の前は清涼な谷川で、仰げば断崖絶壁、頂上の裂けめより一条の滝が轟々と落下していた。断崖の中ほどにトラジャ豪族の岩穴墓場がえぐられてあつた。背景は、緑紫にたなび

く連山の稜線で、宿舎に座るだけで爽涼おのずから至るの秘境なのだ。

農場を管理していた二人の軍属は、私たちに業務を引き継ぐと、そこそこに本隊へ帰って行った。丸腰であつても元兵隊の活力と騒々しさに辟易したらしい。暴力で農場を奪われでもしたよう

な、いまましい顔つきで退散していった。こうなると、耕作、栽培、収穫物の搬送など、一切がわたしの責任となった。これまでの苦難の河原農耕とは雲泥の相違で、豊富な野菜にめぐまれて天国にひとしい環境である。

私たちは出発時に、日本野菜の種子を受領してきていたので、労苦なしに植え付けることができた。土地が肥えているので、すぐに発芽した。その収穫を待つまでもなく、半ヘクタールの農耕地に熟した野菜が毎日のように獲れた。しかし、私たちの任務は、収穫した野菜を三日に一回野戦病院に運ぶことであった。私たちが食べる野菜ではなかった。管理人の軍属が退散した日には、飢えたけだもののように手あたりしだい収穫し、凱歌をあげてむさぼり食ったが、翌日からは自粛を誓い合った。これはあくまでも、野戦病院の僚友に食べさせるものであった。

病人たちは、病院付属農地で収穫されるスジだらけの南方大根や、トゲのようなヒゲだらけの大根の葉っぱ、紫色のツヤもでることのない緑葉のピンポン玉みたいな茄子を食わされていた。温帯野菜である葱などは、ひとかけらも口にできなかった。私たちは健康者ゆえに、雑草まで食ってきたのだが、このすばらしい日本野菜にありついて、病人はどれほど喜ぶだろうか。あたかも、魔法で得た天国産野菜を、いかにも私たちの手で生産したかのように、鼻高々と得意な気持ちで病院へはこんだ。ようにん荷車に野菜を積んでガラガラとひっぱり、十五キロの道を往復するのであるが、病人のよろこぶ顔を思い浮かべると少しも苦にならなかった。

美濃早生大根はもっとも育ちが早くて数多く収穫されるので、大根畑を拡張して病院には大根がとぎれることのないように心をくだあいた。胡瓜、茄子、とくに葱は数少なかったが、においだけでも毎日嗅いでもらいたいと、荷車に積むことを忘れなかった。私たちは、多少の矢悪徳は労働の条件として許されるはずであったが、できるだけがまんした。これで一日も早く治ってくれ、病者への祈りのようなものが、私たちの労働を神聖なものにした。葱の一本でも病院へまわした。

ある日、わたしは病院へ連絡に行った。患者から直接、よろこぶ声を聞きたくなって病室へ見舞に行き、また、庭を散歩している敬称患者に何気ない顔つきでさぐりをいれてみた。

「そんな野菜、きてるんですか。いちども食べたことありません」

患者は異口同音に答え、けげんな顔をした。私はかっとして炊事場へ乗り込んだ。糧秣係の下士官を呼びつけて詰問した。

「ちゃんと配給してますよ。なにぶん、野菜の補給が足りないところへもってきて、入院患者は増えるばかりですからね。気がつかんのでしょうか。もっとたくさん運んできてください」

糧秣係、炊事係、衛生係は、すべて横柄な口のききかたをした。いまどき少尉がなんだ、という顔つきであった。せせら笑って、まともな返事をしなかった。私は一切を了解した。(健康な奴がひとり占めして、肥え太っていやがるんだ！)

私は責任者の将校をしめあげようと思ったが、途中で放棄した。皆、グルになっているにきまっている。上等の野菜は、関係下士官の手を経て上官に捧げられる。将校は見習士官から病院長にいたるまで、病人のぶんをごまかし、自分たちの腹を肥やしているに違いないのだ。

私はすでに感じていた。あの軍属管理の豊饒な野菜畑は戦時中にできていたもので、私たちが貧弱な南方野菜や乾燥野菜で忍んでいるとき、特定の者たちのために秘密裡に開墾していたと言われても仕方あるまい。誰が察知したのかわからないが、それを病院の患者にあたえるというみせかけの名目で奪取し、特定の者たちがひとり占めしようと図ったものではあるまいか。いつも、えらい奴らは眠っていて悪いことをする。少数の自分たちが贅沢して、下級将兵の困苦をかえりみない。階級に胡坐をかいた傲りは、下級将兵を消耗品とみなす戦闘指揮にもあらわれていた。

それでも帝国軍人なのか。腐りきった根性が、日本を敗戦に導いたといっても過言ではあるまい。終戦後に責任上割腹したという上級将校の話をかかない。恥を知るがよい。私は怒った。そして、卑しくも食べ物のことで上司全般を罵る自分をかなしく思った。

わたしは農耕地へ帰隊すると、全員を集めて叫んだ。

「以後、病院への野菜輸送は中止する！」

病院からの請求があれば、手持ち野菜品切れ、新種によってただいま栽培中、当分は補給困難——などの理由をあげて抵抗しようと計った。もし、病院から実情視察に来た場合は、堂々と意見を述べ、徹底的に真相を究明しようと決意した。事実、軍属の残していった野菜はほとんど収穫され、新種の生育は思ったように捗らなかった。このとき以来、私たちの生産意欲が減退したことも事実である。

トラジャの村民は、私たちが移駐してくるとやはり宿舎を訪ねてくるようになった。親しくなるにつれて、私たちは村の青年男女と滝の下へ出て行って水浴した。肩を滝にうたれて、きゃっ、きゃっと呼び、青い淵を泳ぎ、野生のけだもののようにたわむれあった。娘たちはサロンを着けたまま水浴したが、私たちは次第に素裸になった。南国の太陽を思い切り肌に受け、水しぶきをあげて、滝の下を追いつ追われつつしていると、みだらな感情はおこらなかった。ごうごうと落ちかかる男性的な滝のとどろき、懸崖、その上にひろがる雄大な山脈を背景としての健康な肉体の躍動は、わたしたちから日本人一否、敗残の兵士たることを忘れさせた。トラジャ族の青年男女も、水滴をあびて笑う顔に、人種の区別は失われて、あたかも生まれたままの野生に立ち還った思いであった。

このときは、私たちにも階級の仕切りはなかった。少尉も、軍曹も、上等兵もない。すっぱだかの人間が、数千年の原始野蛮の土地から生え出た植物のように、ただ、生きているよろこびに身をまかせているだけであった。私はこのときほど、近代戦の大量殺戮を必要とする文明を無意味にかんじたことはない。

私のほうからも時々、村へあそびにでかけた。私は、宿舎から上流八キロの村の酋長と知り合った。酋長は文盲に近かったが、十五歳の息子のサーリは優秀な少年であった。トラジャ族にもこんな少年がいるのか、と目を見張るほどであった。

サーリは、マレー語も達者であったが、日本語もいくらか話せた。戦時中、日本軍は南方占領地の植民地政策と皇土化(皇民化)の目的から、占領地各所に日本語学校を創設した。ランテパオにも四年制の日本小学校を開校して現地人の宣伝宣撫ろ児童教育にあたった。サーリ少年もこの学校に学んだらしい。早熟なトラジャ族の少年たちは、十五歳にもなるとほとんど結婚していた。酋長の息子ともなると花嫁候補は殺到するはずであるが、サーリは結婚を拒んだ。因習を打ち破ろうとする姿勢、があった。彼は、近くマカッサル中学へ留学するのだと言った。

サーリは日本の少年たちと比べても、はるかにませていた。ときどき、少年とは思えない意見を吐くことがあった。

「オランダは現地住民を文盲にする政策をとり、搾取した」と、サーリは言った。「華僑は、インドネシア人の無知に付けこみ、ポロ儲けをした。セレベス経済を独占しようとした。しかし、日本人は学校を創り、僕たちを教育し、啓蒙した」

サーリは、右手の親指を高く立てて、「ニッポン上等、ニッポン上等」と絶叫した。サーリの日本鼻頂は、同じ黄色人種で髪が黒く、米を主食にしていることが親しみのおぼえはじめであったらしい。オランダ人は威張っていた。秘書の土民を通じてでなければ、直接声もかけなかった。ところが日本人は、どんなブサルトアン(えらいダンナ、ボス)でも、親しく子供にまで話しかけた。しかも、オランダは弱く、日本は強かった。

「いや、日本は弱かったのさ。だから連合軍に負けたんだ。ぼくらは俘虜の身なんだぜ。きみがそう言ってくれるのはうれしいけど」

私が言うと、サーリはむきになって反発した。

「ティーダ、ティーダ(ちがう、ちがう)、ニッポン、クワットウ(強い)。アメリカにだけ負けたんだ。アメリカ、ティンギ、ティンギ(アメリカは強すぎた)」これには笑わされた。だが、見当違いを言っているわけでもない。

サーリは私たちの宿舎にもときどき自転車に乗ってやってきた。半袖シャツ、半ズボンという垢ぬけした服装で、来るときには必ず、バナナや落花生などの土産を持ってきた。サーリの目は、未来に向かって輝いていた。私が末恐ろしいと思ったのは、サーリが、ブギス族に追いつめられたトラジャ族の復興を考えているのではなく、白人支配のないインドネシアの独立を熱望しているからであった。したがって、サーリの極端な親日ぶりには、誤算があったかもしれない。サーリは日本軍を、オランダを追い出しインドネシア独立を支援する東洋の兄弟として受け入れたところが見えた。たしかに日本軍は「大東亜共栄圏」を謳って現地住民を啓蒙した。アジア諸民族開放の意図も聖戦の青写真にはあったし、私たち将兵もそれを信じていればこそ戦えたのだ。しかし、もし日本が勝っていたら、サーリを喜ばし得たであろうか。

いまから思えば、南方占領地を「皇国の領土」とし、インドネシア、ビルマ、インド、マレー、シンガポールの独立ではなく侵略の様相をはっきりみせたかもわからない。日本は負けることによって彼らの独立を可能にした、といえないこともない。だが、サーリや村人たちと親しくふれあっているときには、私たちが負けはしたが、日本はたしかに独立の種子は蒔いていたのだと思わないわけにはいかなかった。多少、くすぐったいが、「ニッポン上等」といわれては、うれしくないはずはなかった。私たちはじっさい、日本が上等であることを示したかったし、彼らの好意に本気で応えようとした。

それにしても、率直で、無条件に慕いよってくるトラジャ族の心根を有難く思い、ときに熱涙をおぼえるほどであった。

敗残の日本人は、邪魔者でなければならない。必要とされるのは、私たちが若干のボロ布や下着類の交換物資を所有しているだけのことで、それ以外は何の得にもならないはずである。彼らはむしろ新しい権力者にペコペコしたほうが身のためなのだ。そこにトラジャ族が私たちをあくまでアジア開放の兄弟と信じているための、素朴すぎる誤解があるのではないか。サーリのように。

しかしわたしは、次第にトラジャ族の本性を理解するようになってきた。彼らは、正真正銘、無償なのである。道徳や、ヒューマニスティックな教育やしつけによってではなく、すっぱだかの心へ、じかにすっぱだかが入ってくる原始人のけがれない魂を持続しているにすぎない。わたしはいよいよ驚嘆し、そのような民族の存在に感動を覚えた。もし、私たちが勝者になっていたら、彼らの根源的な魂に触れる機会もなく、征服者の傲りをもって彼らをエキゾチックな蛮族の後裔として眺め、間隔を置いて接したにちがいない。

たえず悲痛なものが胸を押しつづける抑留生活も、トラジャ族という、通常ならとても見ることも触れることもできないような民族の、人間の源泉にふれあった一季節をもっただけで、わたしは一生得られない宝を所有したと言えよう。だが、別れの日は案外早くおとずれた。

十二月上旬、撤収の命令がでたのである。

わたしたちの手で育てた新種の野菜がやっと収穫の段階に近づいたとき、ランテパオの大隊に復帰しなければならなくなった。野戦病院への出荷を怠っていたので、必ず反動がくると覚悟はしていた。南瓜も大きな葉をつけ、大根畑も青みがかかっている、そよ風にゆれる耕作地を朝毎に眺めるのが楽しみであった。捨てて行くのは惜しかった。それよりも哀切の情感が胸を横切るのは、トラジャ族の村民と別れなければならないことであった。

滅入りによる出発は、急遽、飛び立つ鳥ににている。私たちは農耕危惧を担ぎ、なつかしい滝の畔の宿舎をあとにした。後ろ髪をひかれる思いで、隊列はとぼとぼと元氣なく進んだ。どこから聞いたのか、村人が三三五五と集まり、別れの言葉を口々に、列の周辺をとりまくように歩き出した。青年も娘たちも、ぞろぞろとついてくる。サーリが走り寄ってきた。

「ニッポン上等」と、親指をつきあげた。「みなさん、またきてください」

私はサーリと固い握手をかわした。あちらこちらで、顔なじみの村人と手を握り合っている。

「日本人、バンザイ！」

「インドネシア、トラジャ万歳、万歳、万歳！」

たがいに万歳を叫び合い、泣いていた。滝から数百メートル歩いた谷間の曲がり角まで、彼らは送ってきた。

## 死の行進

ランテパオの野戦病院に復帰すると、占領軍の命令が待ちうけていた。連合軍のビンラン俘虜収容所へ収監されることになったのである。

自給自足の農耕作業で、たとえ五年後であろうとも復員船を待つ、というような私たちの甘い憶測は、完全にぶち破られた。やはり、収容所へぶち込むための猶予期間を与えられていたにすぎない。「これが、本当の運命なのだ」と、瞑目するよりほかなかった。

野戦病院付属大竹部隊として収容所へ投入されるため、中隊は主力の最後尾につく態勢でトラックの配車をまっていた。出発間際になって、トラックが二台不足しているという。すなわち、中隊で最も頑健な兵士三十名が、徒步行軍することになった。もちろん指名されたのは、私を長とする三十名であった。

行軍となれば、大隊一のキャリアをもつ武勲者(?)は、私を除いては誰もいない。北東セレベス(ピトゥン)からトミニ湾沿いに赤道標を踏破し、三千キロを歩いて、なお峻険の山嶽地帯を南下横断した実績を買われたらしい。「すまんが、貴官にたのむ」と、上官に頭をさげられてしまった。私は苦笑せざるをえなかった。俘虜収容所とは気の進まぬ目的地であったが、二百キロくらいのトラック輸送なら気は楽だと思っていた矢先なので、面くらった。だが、「行軍少尉」と異名をとり、尊敬する上官に認められている以上、指名されるのは名誉と心得えねばなるまい

「馴れていますからね」と、私は答えた。

大隊長は、軍馬十頭を私たちにつけてくれた。私の護身用拳銃、それに、特別支給の小銃四丁が武器のすべてであった。中隊長は行軍経路を教え、途中、ジャワ兵補や半日土民の動向などに注意するよう指示した。「盗賊村」が存在することも強調した。

大隊がトラックに分乗し、エンジンの音を残して遠ざかるのを見送りながら、「やれやれ、また歩くのか」と、ため息をつきたくなった。

馬は、現地徴収のやせた小馬ばかりで心もとないが、食料や私物梱包をくりつけ、手綱をとつてあるきだした。重火器もなく、小銃も四丁だけの丸腰なので、最初は歩度も軽く、馬子唄を口づさみたいほどののんびり行進が続いた。

岩窟墓地を周囲に眺めて山を登り、降り、トラジャ族の村がとだえてしまう曲がり角にきたとき、私たちは誰にもなく手をふった。「サンパイ、クトウムラギ(また会う日まで、ごきげんよう)

わたしの耳に、あの竹小屋で終夜きいた滝の落下する音、青年たちや娘たちと水浴した白く泡立つ谷川の流れが、追いかけてくるように響いた。その余韻は終生、私の耳底から消えないであらう。あの感動を抱きしめ、美しい思い出として、これからの過酷な俘虜生活に耐えていこう。そう思うと、せつなくやるせない熱涙が胸をみたしてきた。

「さらば、さらば、トラジャの諸君、ありがとう」

翌日、昼下がりの炎熱登山中、牡の白馬が一頭、突然膝をついてたおれたまま、ついにおきあがらなかった。二、三日後、私たちは反日土民を避けるため、人目につかぬ叢林でやぶ蚊にさされながら露営したり、無人バラックをみつけて泊まったりしていたが、三頭の馬と小銃一丁がぬすまれた。馬が盗まれたのは、無人バラックに不寝番つきで宿泊中、雷鳴をとまなう豪雨に襲われているときであった。小銃は屋間の小休止中、半裸の土人が突然風のようにあらわれ、一瞬のスキにかっさらって行ったものである。いずれもあまりにあざやかな手並みなので、私たちはむしろ感服した。また露営中、これまた警戒を厳重にしていたにもかかわらず、テントを切り取られた。

これらの事件は皆、もともとに襲撃をかけてこなかったのがかえって不気味であった。エンレカンという村の手前で、椰子林にたむろしている兵補の一隊に遭遇した。一本道路であるから避けるわけにはいかない。私は三名の小銃手に安全装置を外すよう命じ、私も拳銃の引き金に指をあてたまま緊張した。

「通りすぎるとき、奴らの目をみるな。堂々と歩くんだ」

私はそう命じながら、兵補を猛獣にみだてている自分をおかしく思った。

かつてハルマヘラに上陸したころ、軍にはジャワ兵補の一隊がいた。彼らは十代の若さで皆従順であった。兵力増強の必要から、軍は占領地の青少年から兵補を徴募し、各部隊で調練したのである。彼ら一人一人をみると、純真で素朴な、愛すべき少年たちであった。終戦後、軍は現地で兵補を開放した。しかし、彼らをジャワへ帰還させる船舶に不足し、足止めになった兵補たちがさまよっていた。一転して、彼らは日本人をにくんだ。元日本兵が兵補に襲撃されたことも事実であった。幸い、この兵補たちは手出しをしなかった。私たちは道をいそいだ。

エンカレンを過ぎて南下すると、一望千里の草原につきあたった。土民が「死の草原」とよんでいたマリンプンである。

かつて私が短時日駐留していたマリンプンの印象は、樹木一本とてない茅葺の大草原で、炎熱にさらされたとしても宿舎にじっとしているかぎりでは「死の草原」の意味がわからなかった。

幹線一本道路は、この草原のまんなかを多少弯曲して貫き、ラツパンの町へ出て行くはずであった。目的地へ出るためには、一本道路を西南にそれた道なき道を貫いて行かねばならない。私は磁石をたよりに目標を定め、草原を斜断するまでおよそ三十キロの行程とふんだ。

前任部隊で駐留した場所は、草原の南端近くの丘陵であったが、その方向は定めがたいほど、大は渺渺とひろがっている。二、三キロあるいて、草原の妖怪じみた広さと茅葺一色に彩られた熱風の天地であることを思い知らされた。どこを見ても尽きることのない茅葺の原と、さんさんと照り付ける太陽しかなかった。すべてが真っ赤に焼け爛れてみえた。その中を、あえぎあえぎ人馬が行く。

「死の草原」は、太陽の熱を容赦なく送る天と、焼け焦げて足元から熱気がはいあがる地上を歩くことによって、死の相貌をあらわしてきたのであった。

十キロ歩いて、依然として火の車が渦巻く天空と、万物を焼き殺す荒涼たる地の果ては、どこまでも続いた。

茅葦に燃え立つ陽炎は血の紅を呈し、光線を照射する空は金色であった。一切がめらめらと燃えていた。焰色の天地に蒸されて、私たちは発狂しそうであった。水筒の水は一滴もない。喉はカラカラで、唇をなめまわしたところで唾液のしめりさえない。ただ、暑い、暑い。

もはや、引き返すにも引き返せなかった。幹線一本道路で、トラックの縦断南下なら一時間かそこらの爆走でラツパンへ出るのではないか。ラツパンからビンランに到着するにも、車なら何でもない。なぜ、私たちだけ行軍の焦熱地獄を経験しなければならないのであろうか。私たちはマカレ付近で、たしかに他部隊のトラックが通りすぎるのを目撃した。たったこの三十名だけが、なぜ、のけ者にされたのか。二台のトラックがないために？ 馬鹿にするな一、私は暑さに逆上しそうであった。

何かの意味で、私たちが灼熱地獄の限界状況にどこまで耐えられるかというような、生体実験のモルモットにされているのではないか。そんな疑問まで湧いてくる。ついに、日射病患者が出た。三人の兵士が、相次いでたおれた。三頭の馬から荷物をおろし、ひとりひとりの患者を馬の背にくくりつけた。その上から日覆いの携帯天幕を装着した。人も馬も息たえだえであった。これ以上患者が続発したら、共倒れである。

「森らしいものが南方に見えます」。先頭の者が叫んだ。

茅葦一色の草原なので、こんもりとした森らしい茂みが、はるかにぼつんと盛り上がっているのがわかった。幻覚ではなかあった。涼しい木蔭がほしかった。とにかく森の中へ一気にすべり込むよりない。歩け、歩け。私たちは途絶えた径を、遮二無二、茅葦をかき分けて一直線にすすんだ。

急げば急ぐほど、森は遠ざかるような気がした。数メートルの歩行にも耐えられないほどくるしい。体内には一しずくの水気もなくなったような、乾物の人間が歩いているのだ。汗はでなかった。出尽した汗の名残に、顔の皮膚に塩が付着している。水がほしかった。目の前に金銀財宝が山となっても私たちは見向きもしなかっただろう。欲も得もなかった。アツプ、アツプと胸をかきむしり、ただ一点に絞られる願望は、満々とたたえた水、もしくはコップ一杯の氷水であった。一滴の水にありつけば死んでもよかった。

「あった、あった、水だ！」

先頭の兵士が奇声をあげた。神は、断末魔の祈りを聞きとどけてくれたのか。まさに奇跡であった。池というには小さい水溜まりを発見したのである。みんな、雪崩を打って殺到した。人も馬も頭を突っ込んだ。

「待て！」と、私は叫んだ。なまぬるい水は澱んでいて臭気をはっしていた。

「顔を洗うのはいいが、飲むのは待て。しんでもよいのか！」

枯草をあつめて燃やした。各人の水筒に溜水を満たし、沸騰するまで煮詰めた。それを溜水に付けて冷やす。その間は小休止とした。五。六人が馬の腹の下に持つぐり込む。馬の影にひれふす者もいた。冷めるのを待ちきれずに、熱い水筒を布で包んで溜水から引き揚げ、ふうふう吹きながら熱湯を喉に流し込んだ。また、汗が噴き出てきた。

「出発！ 森へ入ったら大休止する。がんばれ」

私は号令をくださった。熱湯でも地獄で発見した恵みの液体にはちがいがなかった。最後の力を振り絞って、目的の森へ突入して行った。草原に足を踏み入れてから、六時間を経過していた。

森とみえたのは、奇跡のように茅葺の草原に一本だけ生えた喬木であった。大きな濃ゆい蔭が大地に沈んでいる。吸い寄せられるように、一同はのめり込んだ。身につけたものをかなぐり捨て、素っ裸で倒れ、息もたえだえでしばらく動かなかった。人馬ともに、湯気がたちのぼっている。

呼吸を鎮めるまでに何分か経った。やっと薄目をあげ、仰臥したまま見上げると、樹齢千年以上の楠に似た巨木であった。木根は広く地上を匍い、幹の円周は、大の男が五、六人両手を開いて取り囲めるくらいの太さだ。乾期であるためか葉のほとんどが枯れ落ち、網の目のようにびっしりつまった細枝が、広く高くちじに重なり合っている。日陰はひんやりと涼しく、ときにそよ風がわたる。極楽であった。このまま永久にねころんでいたかった。

しかし、私たちは前進しなければならない。大休止のあと病人が精気をとりにどしたのをきっかけに、奇跡の一本老樹に感謝の敬礼をおくり、私たちは出発した。草原が尽きるらしく、彼方に丘陵の茂みを見た。右手に椰子林が現れ、村落もあるらしい。炎熱は相変わらず続いたが、もう一

息と思えば、気迫もちがってくる。沸かした水と、喬木の蔭の憩いは、たしかに活力を与えた。突然、むらの方向から茅葺の波に見え隠れしつつ、かなりの人数の頭が揺れ動いてきた。

「来たぞ。警戒しろ」私は叫んだ。

先頭に小銃手三名が出て、安全装置をはずした。構え銃の姿勢で進む。先祖代々、村ぐるみ泥棒という奇妙な蛮族の登場らしい。相手が飛び道具をもっていないかぎり、追っ払うことはできる、と私は確信した。案の定、草をかきわけ、ぱらぱらと五、六人の男が私たちの前面に立ちふさがった。私は拳銃を右手に、先頭へ躍り出て行った。

先陣の男たちのうしろに、三十数名ほどの男たちがひしめき寄ってきた。眼光するどく、ほとんどが入れ墨を入れている。腰に蛮刀をたばさえていた。猟銃とおぼしきものは携行していない。人数が同等であれば飛び道具のある方が勝ちである。たしかに、彼らは二、三步たじたじと退いた。私の拳銃と、さっと散開した三人の小銃手をみて出鼻をくじかれたことはまちがいない。

「みんな、ピストルの用意！」私はピストルに力を入れて言い、一同に目配せした。中隊選り抜きの、みるからに頑強・いかつい兵士たちは左右に開き、ポケットに手を突っ込んだ。拳銃をにぎりしめる恰好をしてみせたのである。

「やあ、お迎えごろうさん」私は顔だけわらって、泥棒村の男たちに声をかけた。

「ヤア、イニ、カンポン、ナマ？」(この村の名前は何と言うんだい?)

「サヤ、カンポン、ナマ、クロ」(俺の村の名は、クロだ)

マレー語

のわかる男が不敵にも、ぬっと私の前に出てきて答えた。

「なに、クロ？ 黒か、これは傑作だ」

私が日本語でつぶやくと、兵士たちは吹きだした。「クロ」とは泥棒部落にふさわしい名だ。

「クロの皆様、私たちは先を急ぐので、せっかくのお招きだが止まらない」

「それでは、シャツとズボンを置いていけ」

「暑いが、丸腰の道中はできない。君たちにくれてやるものは何もない。悪かったな」

「それなら、鉄砲を渡せ」

「いやだね。ただし、君たちが早く退散するなら危害は加えない」

彼らは蛮刀を抜かないかぎり戦闘の覚悟はないものと見えた。私は大喝した。

「バカ野郎、早くいけ！ それとも一発くらわすか！」

狩猟らしい男が手をあげて、手下の者に退散を命じた。ざわざわと後退し、すこし離れると私たちに向かって「ニッポン、バカヤロウ」と叫んだ。

「待てッ」と、小銃手の一人が追いかける真似をした。

「小隊長殿、くそ生意気な追いはぎども、懲らしめに征伐していきましょうか」

「目的と違う」。私は一同を制し、ゆうゆうと歩き出しながら言った。

「おかげで冷や汗が出たね。いくぶん、涼しくなったろう」

その夜は、ジャングルのそばで露營した。不寝番をいつもの倍の四名たてて厳重に警戒した。奴らが尾行してこないとは限らないのである。太陽が沈むと、灌木の柱をたててその上から蚊張をかぶせた。一夜の草のしとねであった。草は長芝に似てやわらかく、ひんやりとしている。月はなかったが快晴の空に燦然たる星座がかがやいており、ちょうど真上に南十字星があった。(ああ、炎熱草原を三十キロ歩いたんだなあ)。

昼間が炎熱地獄であったために、夜は星の光にみまもられた極楽の花の上でねているような思いがした。南国の自然はなんと不思議なものであろうか。極限の苦痛のあとに、ちゃんと快適な憩いの揺籃を準備しているとは。(よく、みんな歩いたなあ。疲れているのに不寝番に立つなんて、すまないなあ)

ざわざわと草を踏み、動哨する不寝番の足音が聞こえていた。兵士たちの寝息がさも心地よさそうだ。せめて今夜は夜盗の出没も、スコールの奇襲もないようにと祈った。そして泥のような深い

ねむりに落ちていった。

翌日も、磁石一個をたよりに、ジャングルを西南方へ突っ切って進んだ。道なきジャングルの歩行は、人間より馬の方が辛かったらしい。棘、茨、藤の類に全身をはばまれた。ときには膝をつき、苦しそうに舌を出して動こうとしない。強引に手綱を引っ張っておこし、うなじをなでてやり、なだめすかしつつ、下枝を切り開いて進んだ。

やがて疎林となり、小径があらわれた。道端の藪に、木箱がたくさんころがっているのを、先頭の者が発見した。近づくと、あちらこちらに梱包の山、破損した箱から赤さびた爆弾がのぞいている。私は、ハッとすると同時に凱歌をあげた。どうやら九日本軍のビンラン飛行場に足を踏み入れたらしい。ここは秘匿弾薬庫の跡にちがいがなかった。磁石以外まったく見当つかず、盲目皇軍は偶然東側の径から径へ、迷い込むようにして飛行場の一画へたどりついたらしい。すると、目的地のビンラン俘虜収容所はすぐ目の先にあるはずだ。

こうして、私たちは行程二百キロの炎熱行軍を一週間ほどで突破し、無事、ビンランへ到着した。

私たちはマメだらけの足で、動けなくなっていた。六頭の馬は、鞍傷で背中がはれあがり、ただれた傷口に無数のハエやアブが群がり寄った。人馬ともに半死半生となったのは、急に力が抜けたからにちがいない。

ビンランというところは、死熱の草原マリンプンと異なるところはない。足踏みするとポン、ポンと浮き上がって軽い音がした。地質の荒廃した黄土に茅葦だけが繁茂していて、太古以来、一本の樹木も育たない灼熱の草原であった。

この草原に、南部セレベス二万の旧日本軍が収容されたのであった。到着早々、私は先着の者に脅かされた。ここは(マリンプンも含めて)第一次大戦中のジャワ移民およびドイツ軍俘虜がほとんど死に絶えたという曰くつきの「地の果て」なのだそうである。連合軍は、こんな荒野に放り込んで「芋を作って自活せよ」と言っているらしい。

それでも私たちは、へたばりはしたものの、行軍から開放されたのがうれしくてならなかった。歩かなくて済む。こんな素晴らしいことがあるだろうか。たとえ鉄柵の檻のなかで囚人の屈辱に耐えようと、歩くのはご免であった。

考えてみると、わたしは赤道直下を三千キロ以上歩いてしまった。内地に例をとると、青森—東京—大阪—下関—鹿児島と縦断し、さらに岡山まで逆転したことになる。中国戦線の兵士でも、上海から揚子江を遡って重慶まで歩き、さらに奥地の昆明までさかのぼった者がいるだろうか。セレベスにおいても、こんな体験を強いられたのは私一人であった。

とどめを刺すような戦後の試練はマリンプン高原に尽きるが、フィリピンの「パターン死の行進」といわれる緒戦当時の米兵の苦難も、私の体験に比べるともの数ではないようにさえ思える。私は三千キロ以上歩いた。米兵の俘虜は百キロ足らずを歩いたのではなかったか。私が歩いた三分の一は、「死の行進」といってもよかった。(日本軍の米兵俘虜への残酷な仕打ちとか、その罪状は問わないとして。また、距離の長短で苦痛を推し量れないとしても)

とどのつまり、三千キロ行軍の終着点としてマリンプン俘虜収容所がここにあることを、私は肝に銘じた。

(第五部 完)